**〔解　　説〕**

寛政十一年（一七九九）大坂豊竹座初演。近松柳・近松湖水軒・近松千葉軒の合作による全十三段の時代物です。豊臣秀吉の出世物語であるいくつかの「太閤記」を下敷きに、明智光秀が主君織田信長を討った本能寺の変から、光秀が秀吉に討たれるまでの十三日を十三段にあてはめて描いています。中でも十段目「尼ヶ崎の段」は俗に「太十(たいじゅう)」と呼ばれこの作品を代表する名場面となっています。登場人物の名称は仮名手本忠臣蔵同様、幕府の検閲から逃れるために変えて書かれています。

**〔あらすじ〕**

主君尾田春長（織田信長）の横暴な振る舞いを諫めたことにより、領地没収となった武智光秀（明智光秀）は、本能寺に夜襲をかけ春永を討ちます。備中高松城を攻めていた春長家臣真柴久吉は取って帰して光秀討伐となります。

**〈妙心寺の段〉**

光秀の母さつきは、主君を討った光秀に立腹しており、家臣の四王天田島頭や光秀の妻操の願いも入れず、一人尼ヶ崎に転居してしまいます。光秀は母の心に感じ自刃しようとしますが、四王天と息子十次郎に諫められ、改めて天下取りの戦へと向かいます。

**〈尼ヶ崎の段〉**

さつきの閑居には、操と十次郎、その許婚初菊が訪ねてきており、一夜の宿を借りに来た旅の僧が風呂を沸かしています。十次郎は初菊と祝言をあげ戦場へ向かいます。

すると最前から様子をうかがっていた光秀が現れ、旅の僧を真柴久吉と見破り襖越しに刺しますが、そこにいたのは母さつきでした。敗戦の様子を告げに戻ってきた十次郎は深傷に息を引き取り、光秀と久吉は他日の決戦を誓って別れるのでした。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。予めご了承ください。

(一般社団法人　義太夫協会発行)

**妙心寺の段**

さても逆賊武智光秀、多年の恨み一戦に、春長父子を討ち奉り、妙心寺に砦を構へ、勝ちほこったる諸軍の勢ひ、ともに威風を現はして、備へ厳しく守りゐる。

武智十兵衛光秀。武威轟かす強将の、常にかはりし屈托顔、席を改め詞を正し

「ホヽ三人とも出迎ひ大儀。シテ母人には御機嫌よくお渡りなさるか」

「サイナ、先程も田島頭と自らが、わっつ口説いつ、どうやらかうやらお口が和らぎ、母公様とも睦じう」

「ムヽホそれは重畳出かいた〳〵。さあらば直ぐさま御対面」

「イヽヤ、それには及ばぬ、母が直々参らん」

と、声うちかけを引きかへて、木綿布子に風呂敷包み、背にちょっこりの女の姿見るより驚く人々、操は傍にすり寄って

「系図正しき武智の御家、ことさら四海の武将とも仰がれ給ふ夫光秀。天下の御母公様ともいはるゝ御身が、浅ましきお姿はもしやお心ひしか」

と、尋ねににっこと打ち笑ひ

「ホヽ忝くも清和源氏の嫡流たる武智の系図。元より武勇の家柄なれば、誰に恥づべきいはれなし。年は寄れども心は鉄石。渇しても盗泉の水を呑まずとは、お身たちもよう知ってゐやる筈。心れたわが子の傍、も座を同じうせんはわがの神明へ、恐れあり〳〵。伯夷叔斉を習ひたゞ雲水に従ふて出で行く母。これがこの世の別れぞ」

と、義強き母も恩愛の涙紛らすありさまは、いとゞ哀れぞ増さりける。光秀は黙然と、さし俯ひてゐたりしが操の方は涙ながら

「コレ申しわが。母様のたゞお一人、いづくを当てと長の旅。なぜお留めなされませぬぞ」

「ホヽ不忠不孝との御さげしみ、いまさら申す詫もなく、せめては母のお心に逆らはぬが寸志の孝。四海の内はこの光秀がにある。お留め申すな、そのまゝ〳〵」

「ヲヽさすがは悪人程あって根強い魂。チエヽいはん方なきめ」

と、睨む目元にはら〳〵と、涙かくして立ち出づる心の張弓強弓の引きぞ煩ふ嫁孫の中に悲しき初菊が

「これなう申し様」

と控へる手先振り払ひ、見返りもせず出でて行く。『わっ』と泣き出す人々を制し留めて

「ヤア〳〵者ども。母人の御行方いづくまでも見届けよ。御手道具の用意〳〵」

と光秀が、鶴のひと声あまたの軍卒、、その外

「御母公様のお姿を、見失ふな」

と足早に、後を、慕ふて急ぎ行く。影見送りて光秀は、なにか心に打ちうなづき

「奥操、十次郎、嫁初菊もろとも次へ立ちやれ。用事あらば手を鳴らす」

と、心ありげな詞の端

「アイ」

とは言へど立ち兼ぬる

「ヤアぐづ〳〵となにを猶予。早く立てよ」

ときめつけられ心は後に残れども親子三人打ち連れて、是非なく、次への鐘が無常を告げ渡る、げにもの凄き庭の、忍び出でたる四王天『君の様子はいかゞぞ』と、身をひそめてぞ窺ひゐる。それとは知らぬ光秀が、あり合ふ硯引き寄せて、筆喰ひしめし唐紙の、表になにやらさら〳〵〳〵。かくと見るより、十次郎瞬きもせず物蔭に、守りゐるとも白書院、たゞ一心に書きめ筆投げ捨てゝむんずと坐し、諸肌くつろげを、抜くや玉散る氷の刃、やゝ打ち眺め両眼に、はら〳〵涙喰ひしばり、既にかうよと見えければ主従小蔭を走り出で

「ヤレ、早まり給ふな父上」

と、取りつく十次郎、四王天、鏡のごとき両眼を、くわっと見開き声震はし

「コレわが君。コリャこなた狂気召されたの。今朝より始終の様子、心得がたく思ふゆゑ、万事心をつくる。物蔭より窺へば、出かし顔に辞世の一句、『順逆二門なし。大道心源に徹す。五十五年の夢覚め来たって、一元に帰す』とはナヽヽヽヽヽなんの。君、臣を見ることのごとくせば、臣、君を見ることのごとしと、春長猛威に増長して、神社仏閣を焼失し、万民の苦しむる暴悪、神明これを誅するに、光秀の御手をもって討たし給ふ。天の与ふるを取らざれば、災ひその身に帰す。さほどのことを申さずとも、よく御合点のこなた様、切腹とは馬鹿〳〵しい。人は知らず、この四王天田島頭、殺すこと罷りならぬ」

と居丈高

「ヲヽさうぢゃ〳〵。父の命はわれ〳〵始め万卒に至るまで、御一身に及ぶ御命。臣義を守るとも、君これを補助せざるは、それ将とは申されず。たゞ生害はとゞまり給ひ、下万民の苦しみを救ひ給ヘ」

と右左、涙とともに諫めの詞。光秀はたと横手を打ち

「ハヽア誤ったり〳〵。一天の君の御為には、惜しからざりしこの命、暫しはながらへことを計らん。まづはを乞ひ受けて、なほも背かん者どもを悉く誅戮せん。急ぎこれよりわれは。汝ら二人は久吉が、都へ登るを半途に待ち受け、たヾ一戦にぼっ返せよ。イデ装束を」

と立ち上がれば小姓が心得て運ぶ大紋、立派に着なす骨柄はあたり輝くそのよそほひ、はや引き出だす栗毛の駒、光秀ゆらりと打ち乗って

「ヤア〳〵十次郎。田島頭もろともに西国へ馳せ向かひ、必ずともに油断なく軍功を現はせよ」

と、詞に『はっ』と四王天

「ハヽヽヽヽ君、御出陣には及ばずとも、某かの地に向かひなば、めがを、討ち取るは手裏にあり」

「アヽイヤ〳〵彼もしれ者。定めて遠き計略あらん」

「コハ親人の詞とも覚えず。父に代はって某が、軍配取って一戦に、敵の首を実検に備へんコレ、コレ〳〵〳〵気づかひあるな」

と、勇み進みしわが子の骨柄

「ホヽあっぱれ〳〵潔し。われも後より出陣」

と、手綱かいくりしと〳〵〳〵、乗り出す駿足馬上の達者、の音は秋の野の、虫にはあらでりん〳〵〳〵

「綸旨をやがて頭に戴き、刃向かふ奴ばら打ち立て、追ひ立て切り散らし、追っつけ四海に羽を伸さん。いそふれやつ」

と一散に、大内山へと急ぎ行く。

**尼ヶ崎の段**

一間へ入りにけり。

残る莟の花一つ、水上げかねし風情にて、思案投げ首しをるゝばかり、やう〳〵涙押しとゞめ、

「母様にも祖母様にも、これ今生の暇乞ひ。この身の願ひ叶ふたれば、思ひ置く事さらになし。十八年がその間御恩は海山かへがたし。討死するは武士の習ひと思し召し分けられて、先立つ不孝は赦してたべ。二つにはまた初菊殿、まだ祝言の盃をせぬが互ひの身の幸せ。わしが事は思ひ切り、他家へ縁づきして下され。討死と聞くならば、さこそ嘆かん不便や」

と、孝と恋との思ひの海、隔つ一間に初菊が、立ち聞く涙転び出で、『わつ』とばかりに泣き出だせば。『はつ』と驚き口に手を当て、

「アヽコレ声が高い初菊殿。さては様子を」

「アイ、残らず聞いてをりました。夫の討死遊ばすを、妻が知らいでなんとせう。二世も三世も女夫ぢやと思うてゐるに情けない。盃せぬが幸せとは、あんまり聞こえぬ光義様。祝言さへも済まぬうち、討死とは曲がない。わしやなんぼうでも殺しはせぬ。思ひ留つて給はれ」

と、縋り嘆けば

「アヽコレ、こなたも武士の娘ぢやないか。十次郎が討死はかねての覚悟。祖母様に泣き顔見せ、もし悟られたら未来永々縁切るぞや」

「エヽ」

「サア、とかう言ふうち時刻が延びる。そのこゝへ、こゝへ」

「アイ、アイ」

「サ早う。時延びる程不覚のもと。エヽ、聞分けない」

と叱られて、

「いとしい夫が討死の、門出の物具つけるのが、どう急がるゝものぞいの」

と泣く〳〵取り出すの、鎧の袖に降りかゝる、雨か涙の母親は、白木に白髪の婆、長柄の銚子蝶花形、門出を祝ふ昆布、結ぶは親と小手、六具かたむる三々九度、この世の縁や割小ざね、に着なす鍬形の、あたり眩ゆきいでたちは、さはやかなりしその骨柄。

「ヲヽあつぱれ武者ぶり勇ましゝ。高名手柄を見るやうな、祝言と出陣を一緒の盃。サア〳〵はやう、めでたい〳〵嫁御寮」

と、悦ぶ程なほいや増す名残り『こんな殿御を持ちながら、これが別れの盃か』と、悲しさ隠す笑ひ顔、

「随分お手柄高名して、せめて今宵は凱陣を」

と、跡は得言はず喰ひしばる、胸は八千代の玉椿、散りてなき心根を察しやつたる十次郎、包む涙の忍びの緒、絞りかねたるばかりなり。哀れをこゝに、吹き送る、風が持て来る攻め太鼓、気を取り直し、つゝ立ち上り、

「いづれもさらば」

と言ひ捨てゝ、思ひ切つたる鎧の袖、行方知らずなりにけり。

「ノウ悲しや」

と泣き入る初菊、母も操も顔見合はせ、

「祖母様」

「嫁女、可愛や、あつたら武士を、むざ〳〵殺しにやりました。ノウ初菊。十次郎が討死の出陣とは知りながら、なまなか止めて主殺しの憂き死恥をさらさうより、健気な討死させんため、祝言によそへて盃をさしたのは、暇乞ひやら二つには心残りのないやうと、思ひ余つた三々九度。祖母が心のせつなさを、推量しや」

とばかりにて、初めて明す老母の節義、聞く初菊も母親も、一度にどうと伏し転び、前後不覚に泣き叫ぶ。襖押明け何気なうつか〳〵出づる以前の旅僧、

「コレ〳〵かみさま、風呂の湯が沸きました。どなたぞ、お入りなされませ」

と言ふにこなたは泣き顔隠し、

「ヲヽそれは御苦労、さりながら年寄には毒。跡は若い女子ども、マアお先へ御出家から」

「いかさま、湯の辞儀は水とやら、左様ならば御遠慮なし、お先へ参る」

と立上がれば、三人は涙押包み、奥の仏間と湯殿口入るや

月漏る片庇、こゝに苅り取る真柴垣、夕顔棚のこなたより、現れ出でたる武智光秀

「必定、久吉この家に忍びゐるこそ。たゞ討ち」

と気は張り弓、心は矢竹薮垣の、見越しの竹をひつそぎ槍、小田の蛙のくをば留めて『敵に悟られじ』と、差し足抜き足、窺ひ寄り、聞こゆる物音『心得たり』と、突つ込む手練の槍先に、 『わつ』と玉ぎる女の泣き声、 『合点行かず』と引出す手負ひ、真柴にあらで真実の、 母のさつきが七転八倒

「ヤ、こは母人か、しなしたり。残念至極」

とばかりにて、さすがの武智も仰天し、たゞ呆然たるばかりなり。 声聞きつけて駆け出る操、 初菊もろとも走り出で

「ノウ母様か情けない。この有様は何事」

と縋り嘆けば、 目を見開き

「嘆くまい〳〵。内大臣春長といふ、主君を害せし武智が一類。かく成り果つるは理の当然。系図正しきわが家を、逆賊非道の名を穢す、不孝者とも悪人とも、たとへがたなき人非人。不義の富貴は浮べる雲、主君を討つて高名顔、たとへ将軍になつたとて、野末の小屋の非人にも、劣りしとは知らざるか。主に背かず親に仕へ、仁義忠孝の通さへ立たば、もつさう飯の切り米も、百万石に優るぞや。おのれが心たゞ一つで、しるしは目前これを見よ。武士の命を断つ、刃も多いにこの様な、引つそぎ竹の猪突き槍。主を殺した天罰の報ひは親にもこの通り」

と、槍の穂先に手をかけて、り苦しむ気丈の手負ひ。 妻は涙にむせ返り

「コレ見たまへ光秀殿、軍の門出にくれぐれも、おめ申したその時に、思ひ止つて給はらば、かうした嘆きはあるまいに。知らぬ事とは言ひながら、現在母御を手にかけて、殺すといふは何事ぞいの。せめて母御のご最期に、『善心に立帰る』と、たつた一言聞かしてたべ。拝むわいの」

と手を合はし、諌めつ泣いつ一筋に、夫を思ふ恨み泣き、操の曇りなき、涙に誠あらはせり。 光秀は声あらゝげ

「ヤア猪口才な立て、の舌の根動かすな。遺恨を重ぬる尾田春長。もちろん三代相恩の主君でなく、わが諌めを用ひずして、神社仏閣を破却し、悪逆日々に増長すれば、武門の習ひ天下のため、討取つたるはわが器量。女童の知る事ならず。さりをらう」

と光秀が、一心変ぜぬ勇気の眼色。 取りつく島もなかりけり。 折しも聞ゆる陣太鼓、耳を貫く金鼓の響き『あはや』と見やる表口。 数ケ所の手傷に血は。刀を杖によろぼひ〳〵、立帰つたる武智が一子、庭先に大息つぎ

「親人これにおはするや」

と、言ふも苦しき断末魔。 見るに驚く母親より

娘は側に走り寄り

「ノウいたわしや十次郎様。祖母様といひお前までこの有様は情けない。お心確かに持つてたべ、やいの〳〵」

と取り付いて、介抱泣くばかり。 光秀わざと声あらゝげ

「ヤア不覚なり十次郎、子細はなんと、様子はいかに。つぶさに語れ」

と呼ばはれば、 『ハッ』と心を取直し

「親人の指図に任せ手勢すぐつて三千余騎、浜手の方に陣所を固め、今や帰国と相待つところに、敵はそれとも白浪の、を押切つてに漕ぎ付け、追々都へせ上る。『真柴の軍勢ござんなれ』と、をつくつて味方の軍兵に立つれば、不意を打たれて敵は敗亡。へ騒ぐを追つ立て、追つ詰め、こゝを先途と戦ふうち、後の方より。『真柴久吉の家臣、加藤正清これにあり、逆賊武智が小わつぱ共、目に物見せてくれんず』と、言ふより早く太刀抜きかざし、四角八面に切立てられ、く間に味方の軍卒、残らず討死仕り、無念ながらもたゞ一騎立帰つて候」

と、息継ぎあへず物語れば、 光秀怒りの髪逆立て

「ヤアいひ甲斐なき味方の奴ばら。シテ四王天田島頭は」

「さん候四王天は、目指すは久吉一人と、昨朝よりの一騎駆け。乱軍なれば生死の程も、確かにそれとらず。親人の御身の上心にかゝり候故、未練にも敵を切抜け、これまで落延び帰りしぞや。この所に御座あつては危し〳〵。一時も早く本国へ引き取り給へ、サ早く〳〵」

と、深手を屈せず父親を、気遣ふ孫の孝行心

聞くに老母はせきかねて

「アレ、あれを聞きや嫁女。その身の手疵は苦にもせず、極悪人の倅めを、大事に思ふ孫が孝心。ヤイ光秀、子は不憫にはないか、可愛いとは思はぬかやい。おのれが心たゞ一つで、いとし可愛いの初孫を、忠と義心に健気なる討死でもさす事か。逆賊の名を穢し、殺すはなんの因果ぞ」

と、せぐり苦しき老いの身の、声聞きつけて十次郎

「ヤアそんなら祖母様には、ご遊ばしたか。今生のお暇乞ひ、一度お顔が見たけれど、もう目が見えぬ。父上、母様、初菊殿。名残り惜しや」

と手を取つて、妹背の別れ愛着の、道に引かるゝいぢらしさ。 母は涙に正体なく

「討死するは武士の、習ひといへど情けない。十八年のを刃の中に人と成り、いつ楽しみのもなう弓矢の道に日をゆだね、今朝の門出のその時にも『母様今日の初陣に、天晴れ高名手柄して、父上や祖母様に誉めらるゝのが楽しみ』と、につと笑うたその顔が、わしや幻にちらついて、得忘れぬ」

と口説き立て、口説き立つれば、 初菊も

「ほんに思へばこの身程ない者が世にあらうか。解けて逢ふ夜のきぬ〴〵も永き名残りの、二世を結ぶの枕さへ、交はす間もなうこの様な、悲しい別れをすることはマどうした罪か情ない。私も一緒に殺してたべ、死にたいわいな」

と身を悶え、 互ひに手に手を取交はし、名残涙の暇乞ひ。 見るに目もくれ心消え、母も 老母も声を上げ、『わつ』とばかりに取り乱せば、 さすが勇気の光秀も、親の子故の闇、輪廻の絆に締めつけられ、こたへかねて、はら〳〵〳〵、雨か涙の汐境、浪立ち騒ぐ如くなり。 またも聞こゆる人馬の物音、矢叫びの声かまびすく、手に取るごとく聞こゆれば。 光秀聞くより突立ち上り

「アノ物音は敵か味方か。勝利いかに」

と庭先の、すね木のが踏みしめ〳〵よぢ登り、

眼下の村手をきつと見下し

「和田の岬のより、追々続くの兵船、間近く立つたるの備へ、の馬印は、疑ひもなき真柴久吉。風をくらつてこの家を逃げ延び、手勢引具し光秀を討つ取ると覚えたり」

と言ふより早く、ひらりと飛び下り

「掴みの、イデひしぎ」

と身繕ひ、勢ひ込んで駆け出だせば

「ヤア〳〵武智光秀しばらく待て。真柴筑前守久吉、対面せん」

と呼ばはつて、にかはる陣羽織、小手も優美の骨柄、悠然として立ち出づれば、 光秀見るより仰天し、駆け戻つてはつたと睨み

「ヤア珍らしゝ真柴久吉。武智十兵衛光秀が、この世の引導渡してくれん。観念せよ」

と詰寄れば

「ホホウせいたりな光秀。ともに天を戴かぬ亡君の弔ひ軍。今この所で討取つては義あつて勇を失ふ道理。諸国の武士に久吉が軍功を知らさんため、時日を移さず山崎にて、勝負の雌雄を決すべし。が如何に〳〵」

「ヲヽさすがの久吉よく言つたり。我も将軍とを受けし身の本懐。ひと先づ都に立ち帰り、京洛中の者共へ、を赦すも母への追善。互ひの運は天王山、に陣所を構へ、たゞ一戦に駆け崩さん。首を洗つて観念せよ」

「ホヽヽヽヽヽヽ、なにさ〳〵。たとへ項羽が勇あるとも、我また孫呉が秘術をふるひ、千変万化に駆け悩まし、勝閧あぐるは瞬くうち」

と久吉が、詞はゆるがぬ。 たちまち廻り小栗栖の、土に哀れを残すとは、知らず 知られぬ敵

味方、にらみ別るゝ二人の勇者。 二世を固めの別れの涙、かゝれとてしもの、その黒髪をあへなくも、切払うたる尼ケ崎。 菩提の種と夕顔の、軒にきらめく。 駒のいなゝき迎ひの軍卒、見渡す沖は中国より追々入来る数万の兵船、威風りん〳〵凛然たる、真柴が武名仮名書きに、写す絵本の太功記と、末の世までも残しけり。